

## [IV 個別論文]

# 情報社会における友人コミュニケーション〔I〕

— 若者論の再検討と新たな調査研究に向けて —

今津 孝次郎\*・田川 隆 博\*\*

1. 問題
2. メディアと青少年をめぐる諸議論
  - (1) 内向と自閉への傾斜とモラトリアムの常態化 —70年代—
  - (2) 現状肯定と感性信仰 —80年代—
  - (3) 終わりなき日常と若者の不可視化 —90年代—
3. メディアと青少年の友人関係 —若者論のインプリケーション—
4. ケータイと友人関係 —いくつかの調査結果より—
5. 仮説 —開放性志向と自閉化—

## 1. 問題

1990年代以降、「新たな」友人関係のあり方が若者において見られるということが指摘されるようになった。その多くの議論はコミュニケーションの質的・量的変化に関するものである。本稿の目的は、友人関係の変質が議論されるようになってきた1970年代以降の若者論をとりあげ、その論点と問題点を整理し、実証研究のための仮説的枠組みを提示することである。

社会学的若者論においては、社会の情報化・消費化にともなって、若者や若者文化がどのような影響をうけ、どう変化したのかという観点から考察するパターンが定着している。社会の変化は、若者においてもっとも鋭敏な形であられるという視点を前提とし、その視点から若者の新奇な態度や行動を論じる。しかし、このことは、「新しい」若者論が次の「新しい」若者の登場によって陳腐化させられてしまうという状況を生みだしてしまう。時代とともに議論が風化していくことそのものは、若者論においてのみ見られるものではないが、この風化のスピードが若者論においては非常に急だということは指摘できよう。1970年代以降、さまざまな若者論が登場したが、「新しい」若者論が登場しすぐに陳腐化するというサイクルを繰り返してきた。

なぜ若者論においては、陳腐化のスピードが急なのか。これには二つの要因が考えられる。ひとつは若者の側の変化のスピードが速いことだ。人目をひく「新しい」若者の登場によって、若者論は古くなってしまふ。ただし、この変化というのはある視点によって捉えられた変化であって、若

\* 教育発達科学研究科教授・教育社会学

\*\* 教育発達科学研究科博士後期課程

者自体の変化を論じる際には、論者の視点を抜きにして変化を語り得ないという点には注意が必要だろう。もうひとつは若者を分析する枠組みや理論的基盤の問題である。これらの枠組みや理論的基盤があいまいなものであったり、理論的検討がなされていなかったりするために、若者の表層にあらわれた変化を短絡的に社会変化へと結びつけてしまう。結びつけるもの自体の肝心の考察はなされず、社会変化を与件として扱ってしまう。このような研究者の見方自体が批判的に検討されない限り、若者論は陳腐化を繰り返す悪循環から逃れることはできないだろう。

以上のことから、本研究では、まず70年代以降の若者論の中で特に重要と思われるものにしぼって、論点を整理し、若者論全般に見られる問題点を考察する。そして、いくつかの調査研究にもとづき、近年の若者の特徴を整理し、それに批判的検討を加えることで、調査研究のための仮説を提示したい。

## 2. メディアと青少年をめぐる諸議論

### (1) 内向と自閉への傾斜とモラトリアムの常態化 —70年代—

1970年代の若者論は、エリクソン (Erikson) によるアイデンティティ論の絶対的影響下にあった。彼の「アイデンティティ」「アイデンティティ拡散」「ライフサイクル」「モラトリアム」「忠誠」などの概念は心理学のみならず、人文社会諸科学に大きな影響を与え、青年現象、青年問題解明の主要なよりどころとなった<sup>1)</sup>。先進国に吹き荒れた学生運動や全共闘運動、ヒッピー現象などの対抗文化や「青年の異議申し立て」(Keniston 1971) を説明するためのさまざまな青年論がうまれた。

1970年代の若者は、しらけ、保守化、内向、大人になることの忌避などが論じられたが、もっともそれらを鋭く論じたのは小此木 (1978)<sup>2)</sup> によるモラトリアム人間論と平野・中野 (1975) によるカプセル人間論だった。

モラトリアム人間とは、社会の側から、社会的な責任や義務の決済を猶予された青年期の若者のことを主として指す。しかし、モラトリアム人間に見られる、その時その所で当事者であることを避け、本当の自分を棚上げし、アイデンティティを未決の状態におくというスタイルは、現代の日本社会が共通の社会的性格として互いに共有する社会意識でもある<sup>3)</sup>。こうしたモラトリアムは、豊かな社会の到来により、役割実験をしながら大人になりゆく猶予期間という本来の意味を失う。若者たちは何ごとにも当事者意識をもたないで、孤立と内向に傾斜していくことになる。

モラトリアム人間論のインパクトは、主として高等教育大衆化によってもたらされた青年層の増大と、それとともなうモラトリアムの常態化 (Keniston 1968)、そしてモラトリアムであることに対する若者の側の開き直りという指摘であった<sup>4)</sup>。古典的モラトリアムにおいては、一定の年齢に達すると終結するのが当然のきまりだったし、モラトリアムにある若者の心理は、半人前意識、真剣かつ深刻な自己探求、禁欲主義などで特徴づけられた<sup>5)</sup>。しかし、青年層の増大や消費に彩られた若者文化の台頭により、新しいモラトリアム心理が出現することになった。新しいモラトリアムは、「古いもの」の継承よりも旧世代が身につけていない「新しいもの」の発見と吸収に力がそそがれ、旧世代の権威は低下し、半人前意識は全能感へと変わる<sup>6)</sup>。さまざまな欲求は解放され、遊び感覚が優先され、無意欲・しらけの心理が広がる<sup>7)</sup>。こうした社会性格は、80年代の若者に受

け継がれていくと指摘されてきた。

一方、メディアや情報社会と若者の自我、コミュニケーションの関係性について、もっとも先駆的に考察したのは平野・中野（1975）によるカプセル人間論である。1980年代以降、メディアや情報社会との関連で若者を分析、考察する視点は広く行われている。だが、カプセル人間論は社会の情報化が現在のように高度化していない時期に見られた考察であり、しかも現在の若者論における指摘の原型にもなっており、卓抜な視点であった。

カプセル人間論においては、人は人格と人格をすりあわせることによって個を形成したり確認したりすることはない。例えば、集団を作っているも個々の成員に同等の参加を強制しない、傷つきたくないから傷つけない、自分の気分・思考を押しつけない、しゃべりたくないものを強引に誘わない、集団に加わるのも離脱するのも自由である<sup>9)</sup>。このような形で尊重され、保証される個の自由と意志が存在する。前世代とは相対的にみて人格的接触が低下し、孤立した個をカプセル人間と呼んだ。そのようなカプセル人間は、地縁、血縁、学校縁、会社縁のような共同体的な人間関係を切断するか、少なくともそうした人々との関係を極度に希薄化している。しかし、完全に大衆化した「孤独な群衆」でもない<sup>9)</sup>。互いの個を尊重しあいながら、カプセルを連結させていく。その連結はメディア接触において典型的に見られ、例えば60年代後半、ラジオのリスナーたちは、個々ばらばらな背景をもちながら、そのラジオが流れる時間を共有し、直接にコミュニケーションをとることなく、DJを介してコミュニケーションがはかれる擬似的共同体を作っていた。また、友人同士でつれだって喫茶店にいてもマンガ雑誌を読みふけり、自分の話したいときにだけ会話が成立し、再びマンガを読みふけるという行為を繰り返す。情報メディア（マンガ）を媒介とし、常に他者との回路がON-OFFのできる自由な状況にあって、全体としては、コミュニケーションが継続する。このように「孤立しながら連帯し、連帯しながら孤立する」カプセル人間は、70年代、80年代を通じて、若者の心情・意識・思考・行動を説明するための有力なカテゴリーであった<sup>10)</sup>。

## (2) 現状肯定と感性信仰 —80年代—

80年代は消費の時代として形容することができよう。この消費社会の到来とともに、消費現象をもっともインパクトのある形で分析したのはボードリヤール (Baudrillard) である。彼は「人びとはけってモノ自体を（その使用価値において）消費することはない<sup>11)</sup>と消費社会の原則を示し、人びとは自分を他者と区別する記号としてモノを常に操作していると規定する。ステイタスシンボルやブランド商品、流行などはそれが財としての機能だけでなく、他者との差異を意味する記号として消費されることになる。

80年代の時代精神は、小谷（1993）によれば、どこまでも現状を肯定する姿勢と信仰ともいえるべき感性至上主義である<sup>12)</sup>。すべての当為はフィクションであるし、価値も相対的なものでしかないからひたすら現状を肯定すればいいし、自己の拠り所はもっぱら感性となる。若者は、この時代精神が支配する消費社会の中で自己をとりまく環境を商品に還元し、自己をメディアの中で差異化してそのイメージを映し出す人間となる<sup>13)</sup>。若者たちは、モノによって自己を語り、モノに彩られる外見がパーソナリティやライフスタイルを表し、コミュニケーションのコードとなっていたのである<sup>14)</sup>。消費を通して若者たちはアイデンティティを確認し、様々な自己を他者に呈示するという

スタイルが定着していった。

一方、80年代は情報化が大きく進行した時代でもあり、若者の生活に関連したメディアが多数登場した。とりわけ音楽メディアや映像メディアは急速に進歩し、またパソコンやテレビゲームも若者をひきつけるメディア機器として成長した。そしてこうしたメディアに耽溺したもっとも顕著な例がいわゆるオタクだった。そして、オタクを典型とするメディア依存は、否定的な形で言及されることが多く見られた。稲村（1986）は、コンピュータに接触し、人との関わりを苦手とするような若者が増えていることを指摘し、「機械親和性対人困難症」と名付けた。野田（1987）もコンピュータを扱う若者のなかにアレキシサイミア（失感情言語化症）が一部見られることを指摘している。他にも多々見られるが、共通して指摘されてきたことは、対面的な人間関係からの離脱とメディア・情報・コンピュータなどによるその代替である。宮台（1994）は、消費文化を享受した「新人類」と、消費文化の信仰と記号的差異のゲームから離脱し、それらに過度に鈍感になることによって一人遊びにふける「オタク」を対比して分析している<sup>16)</sup>。いずれにせよ、こうした情報化における新たな人間類型は、消費社会によるモノを介したコミュニケーションという命題とともに80年代の若者を語るキーワードとなっていった。

### (3) 終わりなき日常と若者の不可視化——90年代——

90年代に入り、もっとも影響を与えた若者論を展開したのは宮台（1994；1995；1997など）である。宮台（1995）は、今日は昨日の繰り返し、明日は今日の繰り返しというような「終わりなき日常」が90年代の社会状況を表すキーワードであるとし、その「終わりなき日常」を賢明に生きる技術的な処方として「まったり」と生きる若者を見出す。

宮台（1993）は、80年代の記号的消費や記号的対人関係が、90年代に入って“記号的”に陳腐化したと述べる。端的な例で言えば、かっこよさやおしゃれさの追求が80年代の消費文化を彩ったが、80年代後半から90年代初頭にかけて、「かっこよさやおしゃれさの追求自体がかっこよくおしゃれなことなのか」とメタ化され、次第にそうした他者との差異の追求が無効化していくことである。他者との「最小限界差異」<sup>16)</sup>の追求が無意味化することによって、それまでモノが表示していた個性やパーソナリティは不可視になり、他者が非常に見えにくくなる。そうした不透明な他者のまなざしへの適応として「視線への無関心さ」が防衛的に高められ、それがらせん的に発展し、徐々に一般化する。そして、世代内部でも多様に分化したまま互いの連絡をとりあわず、コミュニケーションの「島宇宙化」がもたらされることになった<sup>17)</sup>。

島宇宙化現象は、同世代であっても、そのことがコミュニケーション成立の担保とはならない。60年代まで志向された世代に共通の若者らしさや若者らしい自分、同じ若者同士ならわかりあえるという感覚は失われ、ディスコミュニケーションと他者の不透明性が上昇した。島宇宙化は、例えば学校内でも生じている。かつては、教室単位の一団感があったり、キーパーソンを中心に二大勢力にわかれたりしていた。しかし現在では、2～4人くらいの小グループに分断され、それぞれが教室をこえたつながりを、街のなかで、あるいはメディアを通じてもつようになっている<sup>18)</sup>。仲間意識や規範の及ぶ範囲はとても小さくなり、共同体のメンバーのまなざしが届かないところでは何でもできる「非倫理的」な行為が一般化する<sup>19)</sup>。その一方で島宇宙内においては、相手の正体や内

面を不問に付したまま、ノリの同じさをあてにして永遠に戯れるという「共振的コミュニケーション」がひたすらおこなわれることになる<sup>20)</sup>。島宇宙は自己にとっての居場所となるが、その基盤はきわめて脆弱なものであり、コミュニケーションの可能性も「ノリ」があうあわないによって担保されていくことになる。

### 3. メディアと青少年の友人関係 — 若者論のインプリケーション —

今までの若者論について、あえて議論を単純化して整理したのが表1である。まず、用語と対象については、1970年代は主に「青年」という言葉が用いられていたが、1980年代以降、「若者」という言葉が用いられるようになる<sup>21)</sup>。70年代までは高等教育の量的拡大を背景に、若者論は大学生が対象だった。それが80年代に入って消費社会が確立し、金銭的に余裕があり、消費に深くコミットする大学生や社会人が主な議論の対象となる。だが、90年代に入り、いくつかの注目された事件が10代の青少年によって引き起こされたこともあり、議論のまなざしは低年齢化し、中学生・高校生が議論の対象となっていく。

社会状況との関連での考察については、70年代の高度経済成長後の経済停滞から消費化・情報化への移行が焦点である。分析視角は、アイデンティティの形成・確立と拡散という視角から若者を論じるスタイルから、アイデンティティとコミュニケーションの関連性の考察へとシフトする。それにしたがって、モラトリアムやカプセル人間、新人類、島宇宙などのキーワードが考案される。

また、70年代までの議論では、青年という発達論的な用語が好まれたことにも見られるように、大人になるのを忌避する若者ややさしさなどの傾向は発達論的にいって問題、あるいは病理ととらえられた。問題ある若者を何とかして社会の一員としての自覚をもつよう促す、規範的な見方が多かった<sup>22)</sup>。古典的なアイデンティティ探求を理想視して、アイデンティティを未決のまま大人になろうとしたり、アイデンティティ拡散している若者を問題視した。

それが80年代に入って「<私>探しゲーム」<sup>23)</sup> というメタファーに端的に見られるように、他者

表1 若者論の変遷

	1970年代	1980年代	1990年代
用語	青年	青年・若者	若者
対象	大学生	大学生 サラリーマン・OL	中学生 高校生
キーワード	モラトリアム人間 カプセル人間 やさしさ しらけ	新人類 オタク	島宇宙 マサツ回避
社会状況との関連	経済停滞	消費化 情報化	消費化 情報化
分析視角	アイデンティティ	アイデンティティ	アイデンティティと コミュニケーション
論点	アイデンティティ の拡散と病理	差異化とアイデン ティティ・ゲーム	コミュニケーション の複雑化とアイデン ティティの困難

の視線を気にし、他者との差異を「ゲーム」のように徹底的に追求する若者たちの分析が現れる。その際、差異がアイデンティティの鍵概念となった。個性や自分らしい自分も他者の視線を意識し、他者と比較し、他者との差異をほんの少しでも追求することによって認識されるようになる。

さらに90年代に入ると、そうした差異の追求が陳腐化したために、アイデンティティは拡散でも混乱でもない新たな問題状況を迎えた。他者とのコミュニケーションが不確実になり、内実をとまなわれないコミュニケーションと自己開示や他者承認の困難性が指摘された。その結果、アイデンティティもまた多元的、流動的なものにならざるをえず、単一の確固たるアイデンティティという問題自体も論じられなくなった。

このように整理して確認できるのは、若者論は論点や強調点は違っても、アイデンティティとコミュニケーションを鍵として常に展開してきていることである。そこで、アイデンティティとコミュニケーションの捉え方の変化についてももう少し詳しく論じていきたい。

若者論は消費化や情報化との関連から考察されてきた。消費文化にもっともコミットするのは若者であるし、情報化においても現在のように携帯電話を使って連絡をとりあう若者が多く見られ、その基本コンセプトはまちがっていないだろう。だが70年代や80年代の若者論は、メディア論や消費社会論と融合してしまったために、若者論という言説の境界はあいまいになった点は否定できない<sup>24)</sup>。もっとも、表層の変化に目を奪われすぎることなく冷静な分析も行われてきた。それがアイデンティティとコミュニケーションを軸とした分析である。

1970年代のカプセル人間論にその萌芽が見られるが、総じて若者論の中心論点は個人問題としてのアイデンティティ形成や拡散、それにとまなう病理という問題から、次第にコミュニケーションを重視する議論へと変化していった。

カプセル人間論は、そのカプセルという言葉がイメージするように自我の殻にとじこもり孤立している印象を与えるが、そうではない。平野・中野（1975）がむしろ強調したのは、カプセルのメディアを通じたコミュニケーションである。こうした見方は現在の若者論の原型をなすものといってよい。エリクソンがアイデンティティの定義に含み混んでいた「他者による承認と共有」というコミュニケーション問題は70年代の当時、あまり検討されていなかった<sup>25)</sup>。その意味で、平野・中野の議論は80年代以降の若者論の土台となった議論ともいえる<sup>26)</sup>。

若者のアイデンティティをコミュニケーションとの関連でもっとも鮮やかに描いたのは90年代前半から中頃にかけての宮台である。宮台の議論を簡単にまとめておこう。宮台（1994）はコミュニケーションのパターンを「人格的コミュニケーション」「非人格的コミュニケーション」「共振的コミュニケーション」の3つに分類する。「人格的コミュニケーション」とは、かつての恋人同士や親友同士にみられるような、親しいものたちだけの間での、情緒的な相互浸透を軸としたコミュニケーションである。「非人格的コミュニケーション」とは、例えば店員と客の関係に見られるような、役割に対する制度的な信頼を軸とするコミュニケーションである。「共振的コミュニケーション」は、「ノリを同じくする」ものたちによるコミュニケーションである。宮台はこのように三つに分類した上で、戦後の若者のコミュニケーションを次のように分析する。

かつては、同じ若者同士ならわかりあえるというような世代という同一性を信頼の機軸にして、情緒的な共感や連帯が志向された。すなわち60年代までの若者においては、「人格的コミュニケー

ション」が行われていた。しかし、70年代に入って、世代間対立を支えていた「大人／若者」というような二項対立は失われ、〈若者〉というシンボルもまた放棄されてしまう。その結果、コミュニケーションにおいて信頼できる前提があまりに弱小になったために、「深い」コミュニケーションが危うくなってしまふ。結果として、相手の正体や内面への深いコミットメントを避けながら、ノリの同じさをあてにして共振しあうようなコミュニケーションが行われることになる。そこでは、情緒的な共感や連帯は問題にならず、同一の島宇宙のなかでだけ通じる記号を用いてコミュニケーションし、防衛的な自己提示の可能性だけが注意の焦点になる。

宮台の議論で特に重要なのは、戦後の若者の変化を徹底的にコミュニケーションの観点から論じたことである。もちろんこのような視点がこれまでの若者論になかったわけではないが、それらは目の前の「新奇な」若者を説明するための補助線でしかなかったり、消費化や情報化という社会の大きな流れに回収されていった。そのため、若者に今起きていることの説明に熱心であっても、それが社会通史的にみてどのような意味を持つのかという視点が欠けていたし、したがって陳腐化するのをもた早かった。90年代以降の若者論のほとんどがコミュニケーションに焦点をあてていることをみても、宮台の議論があたえたインパクトは大きかったといえる。コミュニケーションの分析こそが、若者論において重要であることが認識されるようになってきたのである。

そこで次節では、90年代の若者分析の主流となったコミュニケーションに関する議論のうち、とりわけ携帯電話を用いたコミュニケーションを見ていくこととする。

#### 4. ケータイと友人関係 ―いくつかの調査結果より―

近年急速に普及した携帯電話をほとんどの若者が所有し、頻繁に友人と連絡をとりあっている。ごく当たり前の身近な持ち物として、携帯電話は「ケータイ」と表記されるまでになった。若者の友人関係において、携帯電話はコミュニケーションの手段として非常に重要な役割を示しているとして、携帯電話と友人関係をテーマにした研究も多い（例えば松田 2000；佐々木 2001；田中 2001；伊藤 2001など）。そこで、いくつかの調査研究にしたがって、携帯電話を含めたメディア利用と友人関係の関連について整理してみたい。

携帯電話の特徴は、portable（＝携帯）、mobile（＝移動）、personal（＝個人的）の3つに集約できる<sup>20</sup>。松田（2000）はこのような性質をもつ携帯電話利用とそれをもちいた友人関係の特徴を、「いつでもどこでも連絡がとれる」「個人専用」の携帯電話で、今いる場所や所属している集団にとらわれず「好きな相手」「気の合う相手」とつながる「選択的」な関係と捉えている。この「選択的」な関係とは、いくつかの仲間集団に帰属意識をもち、その集団を時や状況に応じてスイッチするような緩やかなつながりをもつ関係である。

多くの若者が友人関係を取り結ぶツールとして携帯電話を使用している。自由度の高い個人専用の電話によって、いつでもどこでも誰とでも容易につながるような、従来ありえなかったコミュニケーションが成立することになった。

携帯電話と友人関係の関連について、もっとも広範に行われた調査は、総務庁青少年対策本部が1999年11月から12月に行った「青少年と携帯電話等に関する調査」である。この調査は青少年3,152人（有効回収数3,101人）と保護者2,901人（有効回収数2,881人）に対して行われた。

この調査によれば、調査対象者の高校生のうち携帯電話・PHSを所有する割合は全体の58.7%と約6割にのぼる。携帯電話・PHSをもつことで、「連絡をとりやすくなった」と答えた者が94.0%と圧倒的多数を占め、「友人と電話をする時間が増えた」と答えた者が48.9%、「新しい友人が増えた」と答えた者が48.4%、「友人との仲が深まった」と答えた者が56.3%であり、新しい友人を増やしたり、友人との仲を深めるのに役立っていることを明らかにしている。この調査が行われた段階では、一日10回以上使うようなユーザーは全体の7%程度だが、毎日数回はほとんどのユーザーが利用している。携帯電話・PHSを使ったメール機能の普及と使用料の値下がり、一人一台が当然ともいえるような状況などにより、現在はさらに利用が増えていると推測できる。

携帯電話をもつことで「友人との仲が深まった」「新しい友人が増えた」と答えたものが多いという結果は重要な論点を含んでいる。すなわち、携帯電話は単にいつでもどこでも連絡をとりあうことができる便利なツールなのではなく、青少年においては友人関係を深めたり、広げたりするための重要なツールなのである。

橋元らが2000年10月から11月にかけて行った携帯メール利用に関する調査（橋元 2001）によれば、15歳から19歳までの携帯電話利用率は74.2%、そのうち携帯メール利用率は94.3%を示し、携帯電話・PHSをもつ若者のほとんどがメール機能を利用していることがわかる。メールをやりとりする相手については、ふだんよく会う友人64.5%、恋人24.2%なのに対し、家族0.0%、ふだんあまり会わない友人が6.5%となっている。メールをよくやりとりする相手の数は平均で4.8人、15～19歳の若者に限っても6.6人となっている。これは携帯電話に登録できる電話番号やメールアドレスが数百件あることを考えると、意外なほど少ない。携帯電話に関する議論で多くなされてきたのが、さまざまな人との出会いを強調するものだったが、それらの議論に反して若者は日頃よく会っている友人ともっともコミュニケーションがなされているのである。携帯電話については、携帯電話が不特定多数の人との出会いや交流を促進する道具であるという言説がしばしば見られるし、実際そうであることも少なくない。だが、この調査結果が示しているように、実際の使われ方は親密な友人と連絡を取り合うツールとして使われていることが多く、携帯電話は青少年にとっては第一に身近な友人との交流手段となっているということが読みとれる。

携帯電話と友人関係についての指摘は、中村（2000）によれば、おおむね次の二つにまとめることができる。一つは「フルタイム・インティメート・コミュニティ」である。携帯電話は日常的に会う親しい友人との間で使われ、会って話し、移動中や外出先では携帯電話で話し、家では固定電話や携帯電話を使って話すなど、一日中つながりあっているような関係である。第二は、携帯電話の発信者番号表示によって気に入らない相手には出ないなど、コミュニケーションを自由に選択しあう関係が広がっているのではないかという指摘である。状況に応じて人間関係をON-OFF自在に選択しあっており、固定的な人間関係というより、いくつかの関係に適宜スイッチを切り替えるような人間関係である。

一方、携帯電話以外のメディア利用と友人関係との関連性についての実証研究についてもみていこう。橋元（1998）では、携帯電話、テレビゲーム、ポケベル、パソコンなどの利用と友人関係との関連を調べている。それによれば、テレビゲームでよく遊ぶ人は共感性、コミュニケーション耐性、批判受容耐性が低く、感覚志向であり、携帯電話をよく利用する人は共感性や批判受容耐性が



高い一方で、コミュニケーション耐性が低い。また、ポケベルをよく利用する人は、共感性、批判受容耐性が高く、直接対面より電話を好む傾向にあり、現実体験を重視し、感覚志向が小さかった。テレビゲームに関していえば、テレビゲームを利用することで友人が増えたという結果を示すものが多い<sup>29)</sup>。青少年の3分の2がゲーム所有する現在の状況では、テレビゲームを所有することも友人関係を深めたり広げたりするツールの一つであることは認められる。ただし、テレビゲームに関しては一人遊びを前提に開発されるソフトが多く、対自コミュニケーションという側面も大きい<sup>30)</sup>。その点で携帯電話に比べると、友人関係における重要度は低いともいえよう<sup>31)</sup>。

また水野・辻 (1996) は、写真が若者の友人関係にとって重要なコミュニケーション・メディアとなりつつあることを調査結果から示している。写真を撮るのは、どこかに旅行に行ったり学園祭など特別な行事以外でも、遊びに行ったりコンパをしたりしたときに撮ると答えたものが67.2%にのぼり、写真を撮ることが日常化していることが示された。また「友だちと写真を撮ることそのものが楽しい」という質問に肯定的に答えたものは78.4%に達しているが、「友だちと一緒にの写真は友情を目に見える形に変えてくれる」という項目の肯定率や数量化Ⅱ類の結果も比較的大きく、友情をモノにかえて確認するという意味合いが込められている可能性を示唆している<sup>32)</sup>。

いくつかのメディアと友人関係に関する調査から浮かび上がってきた論点をまとめておこう。第一に、友人関係に対して携帯電話がもつ重要性は、他のメディアと比較して相対的に高いことである。テレビゲームは対自コミュニケーションという側面も大きいし、写真は日常化したといっても、四六時中撮っている者は少ない。パソコンに関しては、長い文章や画像などをやりとりしたりするのは携帯電話よりもすぐれているが、パソコン利用には性差、年齢差、階層差という影響をうけやすいし、パソコンもたえず持ち歩いて四六時中利用している人は多くない。携帯電話利用が性差、年齢差、階層差の影響が薄い点からも日常的に気軽に使われている点からも携帯電話の重要性は高いということがいえる。

第二に、多くのメディア利用が友人関係を深めたり広げたりするのに役立つと若者たちに認識されていることである。多くの新たなメディアが登場する中で、積極的に新たなメディアを利用することによって友人関係を営んでいるということがいえよう。

## 5. 仮説——開放性志向と自閉化——

上述したように、若者論の重点はアイデンティティからコミュニケーションへと次第にうつってきた。それでは、コミュニケーション、あるいは友人関係の分析がなぜ重要視されるようになってきたのだろうか。ギデنز (Giddens 1990) は、友人関係こそが、個人の生活に及ぼすモダニティの幅広い影響について解明していく重要な手がかりをもたらしてくれるからだと主張する<sup>33)</sup>。ギデنزの議論を簡単にみておこう。

彼によれば、前近代社会では、友人関係は、将来もしかしたら敵対する可能性のある外部集団に備えて、他の人々との多少とも永続性のある同盟関係を生み出すための手段とみなされていた。こうした制度化した友人関係は、血盟の兄弟や戦友といった同志愛的な形態を基本的にとっており、その性質上、誠実さや名誉といった価値に基づいていた。だが、モダニティと結びついた商品化された市場を含む抽象的システムの大規模な拡大は、個人的な結びつきに対する依存を明確に断ち切っ

ており、友人関係の変容をもたらすことになる。モダニティは「場所を奪う」ものである<sup>39</sup>。それはたんに地域共同体の喪失というより、人々の空間的経験のあり方そのものが変化し、先の時代にはほとんど例のないかたちで距離の近さと遠さを結びつけているのであり、親密さと疎遠さの間に複雑な関係をもたらすということである。人はローカルな日常生活においては親しみや安心感を感じているが、それはローカルな場で特有に発達してきた事柄ではない。そうではなく、時空間の拡大化、すなわちグローバル化によってローカルな場に親密性が「はめ込まれている」のである<sup>40</sup>。だが、こうした信頼を軸とした親密性はアンビバレントなものである。この親密性は制度化されていないがゆえに、関係断絶の可能性が常に存在するのである。友人は「尊敬すべき同士」でなく「腹藏ない善意に満ちた存在」となり、つねに真実を語るものではなく、相手の情緒的安寧を護ってくれるものである。こうした今日の人格的な信頼関係が想定する、相手に心をひらくことの要求、つまり、相手に何も隠してはならないという命令は、安心感と根深い不安感とを混ぜ合わせていく。苦悩や欲求不満は、保護と支援の提供者としての他者に対する人格的信頼の要求と緊密に絡み合っているのである。

さて、ギデンズのこうした議論から引き出されるインプリケーションは、モダニティ化の進行とその帰結によってもたらされた、人格的な信頼にもとづく親密さを保持する困難さである。「友人」の対義語はもはや「敵」や「よそ者」ではなく、「知り合い」「同僚」「誰か自分の知らない人」になる<sup>41</sup>。友人関係を維持するのは、親密感情以外に支えるものがなくなる。こうして制度化されない親密さは、さまざまな技法によって維持されなければならないと考えられる。ここに「親密さの困難」ともよぶべき状況が読みとれよう。このような友人関係がモダニティ化とその帰結分析のための分析拠点として重要な役割を担っているのである。

そこで、もう一度、90年代にさかんに行われるようになった友人関係に関する調査研究に立ち返って再検討してみよう。携帯電話利用に象徴的に見られるような現代の若者の友人関係について、しばしば指摘されてきたことは、「広い」が「浅い」友人関係という見方である。たとえば千石(1991)は現代の若者の友人関係を「多種少量友人」とよび、人間関係の希薄化と指摘する。このような若者コミュニケーションについて指摘されてきたことは、傷つくことが怖いことによる濃密にお互いに関わり合わない表面的な友人関係である。

しかし、若者たちの友人関係は情報化の進展等によって希薄化したとは必ずしもいえない。例えば辻(1999)は、若者の友人関係が不活発化していないことを示した上で、「対人関係を取り結ぶ回線の容量(太い—細い)ではなく、回線のスイッチの固さ(オン—オフ)の容易さがかかったのではないかと指摘する。また浅野(1999)も、「親密さについて考える際にこれまでの通説が前提としてきたのは、『内面』の『深み』に秘められた『本当の自分』を中心において、これをどの程度共有できるかによって<浅い—深い>という軸の上に位置づけるという図式」を批判する。浅野によれば、「浅さ」という次元を想定して見るから「浅く」見えるのであって、それは視点の取り方がもたらす効果にすぎない。

これらの反論が主張することは、「浅い—深い」という軸の規範性であり、異なる軸でとらえることの必要性である。この主張は、妥当なものに思われるが、現代の若者の友人関係が「選択的」だとする主張には、一定の留保が必要だろう。

これらの研究が基盤とするデータは大学生を被調査者としたもので、大学生についてはたしかに「選択的」な点が少なくないだろう。大学生は、アルバイトをしたり、昔の学校の友人がいたり、他の大学の友人を増やしたりなどの機会が多く、さまざまな友人をいろんな場面で作るチャンスがある。

しかし、中学生や高校生の場合、友人関係は学校やクラスを基盤にすることが多く、友人関係は「学校化」されている。出会いのチャンスは、積極的にいろんな場面にはたらきかける一部を除けば、それほど多くないだろう。大学生においてでさえ、田川（2000）によれば、大学生の友人関係への志向性は高く、いろんな友人を作りたいという期待も高いが、それに反して、メンバーの固定、少人数グループ、メンバーの同質性が見られる。また携帯電話利用と友人関係との関連について、例えば橋元（2001）でも見られたように、携帯電話は多くの若者が親しい少量の友人とのコミュニケーションのためにもっとも利用されているのである。藤田・伊藤・坂口（1996）も、小中学生にグループ化が進行しており、少人数で閉鎖的な集団に固執する傾向を見出している。したがって、友人関係が選択的になったとする説には検討が必要であろう。

90年代に入って、実証的なデータにもとづく研究が盛んに行われるようになってきた。80年代までの批評的な議論に比べてこの点は評価されてよい。もっともこれらの調査研究に共通する難点もある。こうしたメディアを介したコミュニケーションが若者に「どのように」営まれているかの描写は熱心であっても、「なぜ」行われているかの分析にはいたっていないという点である。その意味では社会の表層にあらわれた「新奇な」若者を描写することに熱心だった80年代までの若者論とあまり相違はない。若者の友人関係に新しいメディアを利用した親密性の展開・維持・発展が見られるとしても、それがなぜそうなるのかを考察しない限り、ふたたび陳腐化してしまうことになるだろう。友人関係の分析をモダニティやグローバル化の分析のために重要な拠点であると位置づけたギデンズのように、たんに「新奇な」若者を追い続けるのではなく、そこからさらに社会構造やその変化・変動と結びつけた議論をしていく必要があるように思われる。そして、青年後期の大学生を対象とした青年論や若者論だけでなく、まだ十分に解明されていない青年前期の中学生や高校生を対象とした青少年のコミュニケーション論がもっとなされるべきであろう。

そこで、これまでの若者論の再検討と90年代の調査結果の検討を踏まえて、中・高校生の友人関係はどのようなものであるのかについての議論を提示したい。それは、モダニティによる「相手に心をひらくことの要求」が生み出す安心感と不安感が、学校化や高度情報化のなかで、中・高校生にどう展開しているのかを探求することである。とりあえず次の二つを仮説としてあげておこう。

- ① さまざまな友人を作り、友人関係のネットワークを広げたいという欲求や期待は高い。
- ② しかし実態はそうではなく、少人数の気の合う仲間と頻繁に交流しあっている。

前者は携帯電話やインターネットをめぐって一般に考えられているような「開放性」の指摘であり、後者は一般には見落とされがちな「自閉」の指摘である。これら二つの仮説の検証を中心に、実際に中・高校生を対象にした調査を実施し、情報社会での青少年の友人コミュニケーションの仕組みを明らかにするのが次の課題である。

【注】

- 1) 岩佐 1993、8頁。
- 2) 同論文は、小此木(1981)に再録されており、本稿では1981年版を参照することにする。
- 3) 小此木 1981、15-17頁。
- 4) 小此木はモラトリアム心理の広がりや青年期の延長という現象をもたらす直接的な要因について、さらにモラトリアム期間中に継承されるべき技術・知識の高度化による修得期間の長期化と、青年期＝モラトリアム時代の居心地のよさ、という二つのことを指摘している(小此木 前掲書、31頁)。
- 5) 小此木 同上書、20-23頁。
- 6) 小此木 同上書、27頁。
- 7) 小此木 同上書、30頁。
- 8) 中野 1987、176頁。
- 9) 中野 同上書、164-165頁。
- 10) 中野 同上書、180頁。
- 11) Baudrillard 訳書 1979、68頁。
- 12) 小谷 1993、84頁。
- 13) 城戸 1993、106頁。
- 14) 大平(1990)は商品のカタログのなかで自己の個性を語り、自己や他者をモノ化していく人々を「モノ語り」の人々として描いている。
- 15) さらに宮台は、新人類は現実を<物語>として生きる「対人関係記号派」、オタクは現実ではなく<物語>に生きる「対人関係退却派」という対照性を見出している(宮台 1994、188頁)。
- 16) Baudrillard 前掲書、124頁
- 17) 宮台 1994、243頁。
- 18) 宮台 同上書、246頁。
- 19) 宮台はこのような状況を「仲間以外はみな風景」とよぶ(宮台 1997、130頁)。人目を気にしない傍若無人に見える若者たちの振る舞いも、仲間以外の他者はただの風景に過ぎず、何をしても気にかけないし、その必要もないという状況である。
- 20) 浅田彰は80年代前半に当時の若者たちの心性を「ノリつつシラケ、シラケつつノル」というように表現したが、80年代はそれが積極的に志向されたのに対し、宮台はそういう状況を、あくまでも他者の不透明性の上昇と自己の居場所確保のための防衛として描いている。
- 21) 小谷は、「青年」という言葉が発達論的意味を込めているのに対し、「若者」という言葉は、単に若い世代という意味で用いられており、青年論は重苦しい当為を論じているが、若者論は「軽い」ものが多いと指摘する(小谷 1993、iii頁)。
- 22) 例えばモラトリアム人間においても、小谷はモラトリアムであることに開き直る若者たちに小此木はある種のいらだちさえ感じていると述べる(小谷 1993、59頁)。
- 23) 上野 1987。
- 24) 石田(1998)はこのような状況を指して、「メディア論と若者論の不幸な結婚」と表現してい

る。

- 25) 栗原 (1981) は「ジャック・ラカンの〈鏡像段階〉の概念が示唆するように、またエリクソンの同一性の概念が『その人の本質的性格の他者による承認と共有』を定義に含むことによっておのずと語っているように、自己の成立にとって他者の存在はきわめて重要」と述べているように、他者の重要性を認識している論者は当時も見られた。
- 26) 守弘 1993、148頁。
- 27) 松田 2000、115頁。
- 28) 例えば総務庁青少年対策本部 1991など。
- 29) 例えば水野・辻 (1996) の調査によれば、テレビゲームで遊ぶ者を100とすると、一人で遊ぶときが多い者が56.8%と過半数を占めている。またテレビゲームの対自コミュニケーションという点に関しては、香山 (1996) が臨床観察から、対人関係をうまくもてない少年がテレビゲームで癒される例を報告している。
- 30) 橋元もテレビゲームについては、携帯電話やポケベルの利用者ほど友人関係との深さとの直接の関連が見られなかったと指摘している (橋元 1998、129頁)。
- 31) 水野・辻 1996、49頁。
- 32) Giddens 訳書 1993、147頁。
- 33) Giddens 同上書、176頁。
- 34) Giddens 同上書、175頁。
- 35) Giddens 同上書、148頁。

## 【文 献】

- Baudrillard, J., 1970, *La Societe de Consommation Ses Mythes, Ses Structures*, Editions Denoel.=1979 今村仁司・塚原史訳『消費社会の神話と構造』紀伊國屋書店。
- 浅野智彦 1999, 「親密性の新しい形へ」富田英典・藤村正之編『みんなぼっちの世界』恒星社厚生閣。
- Erikson, E. H., 1968, *Identity: Youth and Crisis*, W. W. Norton.=1973 岩崎庸理訳『アイデンティティ——青年と危機——』金沢文庫。
- 藤田英典・伊藤茂樹・坂口里佳 1996, 「小・中学生の友人関係とアイデンティティに関する研究——全国9都県での質問紙調査の結果より——」『東京大学教育学部紀要』第36巻。
- Giddens, A., 1990, *The Consequences of Modernity*, Polity Press.=1993 松尾精文・小幡正敏訳『近代とはいかなる時代か? ——モダニティの帰結——』而立書房。
- 橋元良明 1998, 「パーソナル・メディアとコミュニケーション行動」竹内郁郎・児島和人・橋元良明編著『メディア・コミュニケーション論』北樹出版。
- 橋元良明 2001, 「携帯メールの利用実態と使われ方——インターネットによるEメール利用との比較を中心に——」『日本語学』第20巻第10号。
- 平野秀秋・中野収 1975, 『コピー体験の文化』時事通信社。
- 稲村博 1986, 『機械親和性対人困難症』弘文堂。

- 石田佐恵子 1998, 『「有名性」という文化装置』 勁草書房。
- 伊藤耕太 2001, 「携帯電話利用とコミュニケーションの変容? 研究動向の批判的検討」『同志社社会学研究』第5巻。
- 岩佐淳一 1993, 「社会学的青年論の視角——1970年代前半期における青年論の射程——」小谷敏編『若者論を読む』世界思想社。
- Keniston, K., 1968, *Young Radicals: Notes on Committed Youth*, Harcourt, Brace & World. = 庄司興吉・庄司洋子訳『ヤングラディカルズ』みすず書房。
- Keniston, K., 1971, *Youth and Dissent: The Rise of a New Opposition*, H. B. Jovanovich. = 1977 高田昭彦・
- 高田素子・草津功訳『青年の異議申し立て』東京創元社。
- 城戸秀之 1993, 「消費記号論とは何だったのか」小谷敏編『若者論を読む』世界思想社。
- 小谷敏 1993, 『「異議申し立て」の嵐が去ったあとに——70年代の社会と若者像——』小谷敏編『若者論を読む』世界思想社。
- 小谷敏 1993, 「消費社会の到来と『絵ノリ』現象——80年代の社会と若者像(1)——」小谷敏編『若者論を読む』世界思想社。
- 栗原彬 1981, 『やさしさのゆくえ——現代青年論——』筑摩書房。
- 松田美佐 2000, 「若者の友人関係と携帯電話利用——関係希薄化論から選択的関係論へ——」『社会情報学研究』第4巻。
- 松田美佐 2001, 「パーソナルフォン・モバイルフォン・プライベートフォン——ライフステージによる携帯電話利用の差異(携帯電話と社会生活——日常生活と携帯電話)」『現代のエスプリ』至文堂、405号。
- 水野博介・辻大介 1996, 「若者の意識と情報コミュニケーション行動に関する実証研究——大学生の電子メディアおよびパソコン所有・利用とコミュニケーション行動」『埼玉大学紀要(埼玉大学教養学部編)』第32巻第2号。
- 宮台真司 1994, 『制服少女たちの選択』講談社。
- 宮台真司 1995, 『終わりなき日常を生きろ』筑摩書房。
- 宮台真司 1997, 『まぼろしの郊外——成熟社会を生きる若者たちの行方』朝日新聞社。
- 宮台真司・石原英樹・大塚明子 1993, 『サブカルチャー神話解体——少女・音楽・マンガ・性の30年とコミュニケーション——』アクロス・ボックス。
- 守弘仁志 1993, 「情報新人類論の考察」小谷敏編『若者論を読む』世界思想社。
- 中村 功 2000, 「携帯電話を利用した若者の言語行動と仲間意識」『日本語学』第19巻。
- 中野収 1987, 『現代史のなかの若者』三省堂。
- 野田正彰 1987, 『コンピュータ新人類の研究』文藝春秋。
- 大平健 1990, 『豊かさの精神病理』岩波書店。
- 小此木啓吾 1978, 『モラトリアム人間の時代』中央公論社(同 1981, 『モラトリアム人間の時代』中公文庫)。
- 佐々木輝美 2001, 「携帯電話の所有と青少年のコミュニケーション行動」『青少年問題』第48巻第

4号。

千石 保 1991, 『「まじめ」の崩壊』サイマル出版会。

総務庁青少年対策本部 1991, 『青少年の友人関係』。

総務庁青少年対策本部 2000, 『青少年と携帯電話等に関する調査研究報告書』。

田川隆博 2000, 「青年期における友人コミュニケーションの現代的諸相——アイデンティティとの関連性を中心に——」『名古屋大学教育学部紀要』第46巻第2号。

田中ゆかり 2001, 「大学生の携帯メール・コミュニケーション」『日本語学』第20巻。

辻 大介 1999, 「若者のコミュニケーション変容と新しいメディア」橋元良明・船津衛『子ども・青少年とコミュニケーション』北樹出版。

上野千鶴子 1987, 『＜私＞探しゲーム——欲望私民社会論』筑摩書房。